

良 質 た け の こ 増 産 試 験

鹿児島県林業試験場 森 田 茂

1. まえがき

鹿児島県の食用筍の代表としては、モウソウチク、ホテイチク、カンザンチクが挙げられるが、青果用として、又、缶詰用として毎年、消費量も増大している。この資料は、これらの対応策としての良質筍増産を目的とした母竹の施肥管理試験の成果の一部である。

2. モウソウチク（薩摩郡入来町試験林）

(1) 試験方法

1 試験区の面積は 400m² (20×20m) で各種調査は中央部の 100m² (10×10m) について行い、施肥区分は無施肥区、三要素区、三要素・硅カル区、三要素・硅カル多用区の2回繰返しである。三要素は10a 当り住友森林特号 (N : P : K = 20 : 10 : 10) 150kg, 硅カル 100kg (多用区は 200kg) で、施肥は2月に年間施肥量の6割, 残り4割は7月に施した。伐竹は5年生以上を12月に行い、竹林の管理は省力上、施肥、除草、伐採、筍収穫だけとした。

(2) 調査結果及び考察

ア. 発筍収穫結果

表-1 発 筍 ・ 収 筍 調 査 (1 a 当り)

施肥区分	発筍数		収 穫 筍 (本数/重量)			猪害筍	止り筍	成 竹	発筍総数	発筍比	
	早 掘 筍	普通掘筍	計								
無 施 肥	本	kg	本	kg	本	kg	本	本	本	本	
	1.0	0.3	47.0	40.5	48.0	40.8	7.5	0	8.5	64.0	100
三 要 素	20.5	9.0	126.0	103.3	146.5	112.3	2.0	2.0	11.5	162.0	253
三要素・硅カル	7.5	2.6	52.0	68.3	59.5	70.9	2.5	0.5	14.5	77.0	120
三要素・硅カル多用	22.5	8.5	91.5	100.0	114.0	108.5	0.5	0.5	15.5	130.5	204

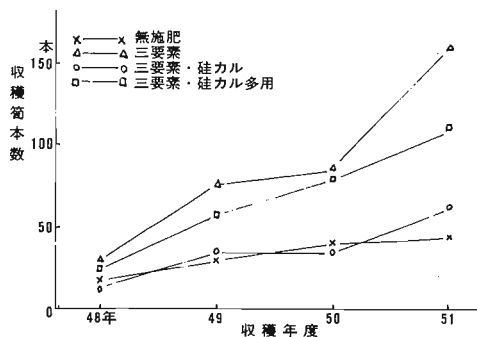


図-1 年度別での収穫筍量 (1 a 当り)

施肥開始後4年目の筍の収穫は50年11月7日~51年3月23日に3回早掘りを行い、4月1日~4月24日に普通掘りを7回行った。表-1のように、三要素区及

び三要素・硅カル多用区で収量、発筍量は多く、三要素区で10a 当り1600本にのぼった。又、図-1のように51年度は出番年に当り収穫量が多いが、50年度は非番年にもかかわらず、出番年の49年度より多くなっており、本試験地は年々収穫量が上昇している。

イ. 立竹調査

表-2 年度別新竹発生本数と稈径 (1 a 当り)

本数 稈径	年 度			
	47 年	48 年	49 年	50 年
本 数	11.0本	9.0本	7.5本	9.0本
稈 径	8.4cm	8.6cm	9.2cm	9.1 cm

注) 50年の新竹本数は1 a 当り無施肥4.5本, 三要素, 三要素・硅カル10本, 三要素・硅カル多用12本。

表-3 立竹密度の推移

(1a当り)

年度 本数	試験地 設定時	47年			48年			49年			50年		
		新竹	伐竹	残存数	新竹	伐竹	残存数	新竹	伐竹	残存数	新竹	伐竹	残存数
立竹本数	本	本	本	本	本	本	本	本	本	本	本	本	本
	22.6	11.0	13.0	20.6	9.0	7.0	22.6	7.5	6.5	23.6	9.0	8.6	24.0

試験地設定時の稈径は平均 7.9cmであったが、10a 当り200本を目標に管理した所、立竹密度は220 ~ 240 本となっており、新竹は年々大径化 (8.4 → 9.2cm) している。

ウ. 筍品質成分調査

49年5月に収穫した筍の良質・悪質別での成分と、51年4月5日に収穫した筍の施肥別での成分を、本県工業試験場に依頼して分析してもらった結果を表-4

表-5に示す。ところで、良質筍と悪質筍とは一般に言われる下記の区分によった。

良質筍……外形は砲弾形、稈鞘(筍皮)は黄褐色、
悪質筍……外形は円錐体に近いもの、筍の基部が急
にもり上がったもの、稈鞘は褐色

又、これらを可食部の歩留りという立場から見ると、可食部である筍の上部が良質筍は68%、悪質筍は39% という調査結果でも良質筍は可食部が多いと言える。

表-4 良質・悪質別筍の成分

品質	部位	水分	全窒素	灰分	P H	糖濃度
良質	上部	87.5%	0.41%	0.90%	6.45	6.07%
	下部	88.2	0.23	0.50	6.45	6.27
悪質	上部	89.6%	0.61%	1.11%	6.49	6.45%
	下部	90.0	0.44	0.78	6.30	7.07

表-5 施肥別での筍の成分

採取月日	施肥別	水分	蛋白質	直糖	繊維	灰分	P H	鉄 mg
4月5日	施肥区	90.5%	3.6%	1.48%	- %	0.89%	6.55	- %
	無施肥区	90.0	3.3	1.14	-	1.00	6.73	0.44

表-4では、品質による成分の相違は灰分以外は特になかった。灰分は悪質筍に多く、このことは“アク”の強さに関係するものと思われる。それから、施肥別での筍の成分の相違は表-5のとおり、ほとんどなかった。

3. ホテイチク (川内市水引町試験地)

母竹の施肥管理試験を行っているが、施肥による発

筍量の増加は著しいものがあり、50年度の発生では、無施肥に対して15倍もの発筍量があった。

4. カンザンチク (輝北町上百引試験地)

試験区分を1300本区、2600本区、3900本区、自然放任区の立竹本数密度別による施肥試験を行っているが、現在のところまだ、施肥効果は少ないが、今後とも、良質筍増産技術の確立をはかりたい。